中野区教育委員会会議録　平成２２年第１回定例会

○開会日　平成２２年１月８日（金曜日）

○場　所　中野区教育委員会室

○開　会　午前１０時００分

○閉　会　午前１０時４９分

○出席委員（５名）

中野区教育委員会委員長	大　島　やよい
中野区教育委員会委員長職務代理	飛鳥馬　健　次
中野区教育委員会委員	山　田　正　興
中野区教育委員会委員	高　木　明　郎
中野区教育委員会教育長	田　辺　裕　子

○欠席委員（０名）

○出席した事務局職員（６名）

教育委員会事務局次長	教育長事務取扱
参事（教育経営担当）	合　川　昭
副参事（学校再編担当）	吉　村　恒　治
副参事（学校教育担当）	寺　嶋　誠一郎
指導室長	喜　名　朝　博
副参事（生涯学習担当）	飯　塚　太　郎
中央図書館長（統括）	小谷松　弘　市

○担当書記

教育経営分野	落　合　麻理子
教育経営分野	上　田　仁

○会議録署名委員

委員長　　大　島　やよい

委　員　　山　田　正　興

○傍聴者数　　２人

〔報告事項〕

（１）委員長、委員、教育長報告事項

・１２／１８　　上高田小学校研究発表会について

・１２／２１　　経済同友会出張授業について

・１２／２４　　中野区医師会子育て応援団について

・１２／２６　　東京都小学校吹奏楽連盟バンドフェアについて

・１／４　　中野区教育委員会仕事始め式について

・１／７　　経済同友会教育問題委員会講演会について

・１／８　　第四中学校冬休み明け集会について

（２）事務局報告事項

（なし）

〔協議事項〕

（１）平成２２年度使用特別支援学級用教科用図書（一般図書）の採択の変更について

中野区　教育委員会
第１回定例会
（平成２２年１月８日）

午前１０時００分開会

大島委員長

おはようございます。

ただいまから教育委員会第１回定例会を開会いたします。平成22年度の第１回目の会議ということになります。

本日の出席状況は、全員出席です。

本日の会議録署名委員は、山田委員にお願いいたします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりです。

それでは、日程に入ります。

＜委員長、委員、教育長報告事項＞

大島委員長

初めに、委員長、委員、教育長報告です。

私から報告します。

昨年の話になるんですが、昨年12月18日、教育委員会の午後、上高田小学校で研究発表会がございましたので、行ってまいりました。このテーマは国語科の学習を中心にということで、自分の考えを表現したり、人の考えを聞いたりしてかかわりを持とうという子どもを育成するという目的、研究主題でございます。１年から６年まで各教室で国語科の授業が行われたようで、なかなかそれぞれ工夫されて大変おもしろい楽しい授業で、例えば１年生は言葉の仲間分けクイズとか、それから、３年生ですとことしの思いを漢字１字であらわそうとか、６年生なんかは100年後の未来についてパネルディスカッションをしようとか、あと５年生は食生活を考えようという討論会ということでインスタント食品と私たちの生活というようなことですけれども、何かカップラーメンはいいのか悪いのかとか、そういうのを話題にして、大変身近な食品を話題にしていたので、とても興味深く、おもしろく拝見しました。みんな活発に討論なんかもしているようで、私もその前のときにほかの小学校の６年生の討論会があったときに女子の発言が少なくてちょっと寂しかったというような話をしたことがあるんですけれども、このときの授業に関しては、男子も女子も非常にみんな活発に意見を言っていて、ちょっと安心いたしました。

それから、その後で講演会がございまして、元ＮＨＫのアナウンサーをされていらしたという経歴を持つムラマツ先生がコミュニケーション能力、言葉を通して人とかかわる力をどう育てるかという主題でお話になったんですけれども、やっぱりさすがにアナウンサ

ーの方だけあって、大変お話がソフトな中にも人をひきつける力というんでしょうか、そういうのがあるお話しぶりで、私も大変お話の中に入っていったというか、ひきつけられたんですけれども、コミュニケーション能力について、その定義とか、それからこんなふうに大事なんだとか、それから授業の具体的なやり方についての応用のお話が大変先生方にも参考になったんじゃないかと思いまして、ちょっと細かいのは省略しますけれども、いろんな進め方についての工夫の具体的にこういう学校ではこういうものをテーマにしてやりましたとか、こういう質問が出るような授業をするには、こういうふうな持っていき方がいいとかといういろいろ事例を挙げて説明をされていて、実際の授業をやるときの参考にとてもなったんじゃないかなというふうに思いました。

そんなことで大変楽しい研究発表を聞いてまいりました。

あとは、１月４日には教育委員会全体として仕事初め式をいたしましたので、我々教育委員各自もそれぞれのことしの所感のようなことを述べました。ともかくことしもみんなで一丸になって頑張っていこうというような意識を共有したんじゃないかなというふうに私は思っております。

私からは以上です。

飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私も委員長さんと上高田小学校の研究発表に参加してきました。中野区はコミュニケーション能力を育成しようという取り組みをしているわけですが、ここ一、二年でしょうかね。ようやく学校で取り組みの成果が出てきたというか、非常に充実した発表が続いていると思うんですね。昨年も何校か行きましたけれども、随分まとまってきているなというような気がします。どこの学校もやっぱりコミュニケーション能力、子どもたちが人の前で話をするとか、思いを伝えるとか発表したりすることが非常に苦手であると。前回も申し上げましたけれども、単語しか言わないみたいな、そんなのがあってということで、現場ではご苦労しているなと。子どもの実態がそうなっているんだなという気を改めてしました。

上高田小学校の取り組み、今、委員長さんが言われたように、非常に各クラスともきめ細かにやっていました。例えば５年生ですかね。インスタントラーメンが体にいいか、悪いかみたいなことを討論するわけですけれども、私の今まで見たものだと、大体賛成と反対が多いんですね。大体デメリットなんかを討論すると。この上高田のおもしろいのは中

間がいるんですよ。中立派みたいなのが。どちらとも言えないみたいなのが。それがまたおもしろいところで、やり方もいろいろあるんですけれども、意見は中立派しか聞けなくて、答えるのは賛成と反対が答えるだけとかいろんなやり方があることはあるんですが、お互いにやり合うだけじゃなくて、勝った、負けたじゃなくて、何か討論を深めるという意味ではそういうやり方もあるのかなと思いましたけれども、いろんなやり方があっていいとは思いますが、ともかく子どもの意見を引き出すといいますかね、そういう意味でよかったなと思うんですけれども。

ちらっと先生の教卓を見たら、先生の教卓の上に高校生のための生活学という本があるんです。先生は高校生ぐらいがそういうインスタントラーメンとか簡単な食事しかしないものを参考にして、小学生に投げかけているんだなという気がしましたけれども、それでもよろしいと思うんですけれども、先生はやっぱり高校生の生活までちゃんと調べないといけないということがわかりました。小学生のほうがもうちょっと食は充実していると思いますので、高校生、大学生のほうが間食であったりということで、インスタントラーメンとか食べる率が多いのかもしれない。ちょっとおもしろいなということでした。

あとは、100年後の未来とほかの学校でもやっていましたけれども、どういう社会になっているかという科学技術のこととか、あるいは車がどうなっているか、そういうのもやっていましたね。

それからあとは、今ＮＨＫの元アナウンサーの講師の話で、ああ、そうかなと思ったことは、やっぱり割と私たちがやってきたことというのは、今までは子どもが調べて、まとめて発表して終わりという感じが多いんですね。質問ももちろん受けるんですが、質問のある方というふうに生徒は聞くんですけれども、質問が出ないと。それはやっぱり一つの完結してしまう形だからだめなんだという話を言っていましたね。途中で何か、最後まで行く前に話を聞いたりすることがより討論を発展させるといいますか、私たちもそうなのかもしれませんが、完璧に言われてしまうと恐らく講演会で質問する方は滅多に少ないんですけれども、途中ならばいろいろ考えているわけですから、そういうやり方として、だから要するに、その講師の話だと発表なんだけれども、聞き手中心の発表だというんですね。聞き手を中心にして発表をする。発表者が中心じゃないんだというんですね。聞き手の人がやっぱりどんな質問をしてくれるかがそれは大事なことだということで、これはまたよかったなと、私も勉強をさせていただきました。

それからあと、コミュニケーション能力とは何かという定義が書いてありましたね。こ

ういう定義をしているんだなと。それもさらに勉強させてもらいました。

以上です。

大島委員長

高木委員、お願いいたします。

高木委員

昨年12月21日、所属しています経済同友会の学校と企業経営者の交流活動推進委員会の仕事で、都立の松原高校の出張授業に行ってきました。同校では１年生を対象の進路事業として職業講話という授業をやっているそうです。経済同友会から何人か、あと卒業生から何人か、地元の方から何人かが参加しまして、１年生に対して「私の仕事」という演題で自己紹介、職業選択の理由、仕事の魅力、やりがい、苦労話等々を話して職業意識を高めるということでございます。

私のところでは30数人ぐらいの生徒さんを対象に60分の授業を２回転いたしました。人は何のために働くかというのを題にしまして、キャリアデザインという概念を少しお話ししたと。高校１年生が子どものころになりたかった仕事をちょっと書き出してもらって、それに対しての解説を加えるというようなことをやったんですけれども、やはり高校１年生ということは中学３年生のすぐ隣で、実際その区の場合は区立の中学の１年後の姿を生で見られる。中野のほうの卒業生ではないと思うんですけれども、非常にいい機会だったなと思います。松原高校は平均的な高校さんで、非常に私のクラスは熱心に話を聞いていただけたので、よかったです。

12月23日の天皇誕生日は、私が育成会会長を務めております野方少年消防団の防火祈願クリスマス会というのに出席してまいりました。消防少年団というのは、少年少女が防火についての知識、技術を学ぶとともに、団体生活を通じて規律や社会的特性を養い、防火防災思想の普及と社会奉仕を目的として活動をしている団体でございます。野方消防署の少年団は大体30人ぐらいの小学生、中学生が月１回活動をしております。当日は９時に集合しまして、午前中はしらさぎホームの慰問を例年やります。その後、11時半からクリスマス会ということで、私はクリスマス会からの参加ですけれども、皆さん元気よく規律正しく活動している様子がうかがえて非常によかったです。

あと年明け４日は私も教育委員会の仕事初めに出席させていただきました。

それから昨日、１月７日の木曜日、午後５時から所属しています経済同友会の教育問題委員会の第６回委員会で文部科学副大臣の方の講演を聞いてきました。題目が新政権の教

育政策格差解消策を中心にということで、予定は１時間の講演プラス30分の意見交換だったんですが、どうも熱が入ったらしくて、１時間15分ぐらい講演をされたので、質問の時間がちょっと短くて、私も手を挙げたんですが、手は当たらなかったです。講師は私と同じ年なんですが、東大を出て通産省に入り、その後、退職された後慶應義塾大学や早稲田大学あるいは東京大学等で教鞭をとられて、そのほか母校の灘中学、高校でも教えたことがあるということで、初等、中等教育については非常に造詣が深い。実際実務的なところで文科省の官僚の方と同じぐらいの知識があるなという印象を持ちました。

当日、一通りいろんな現在の教育政策についての説明がありまして、日本の教育資質の割合が低いこととか、あと秋田県の例をひいて、これからどういうふうに小中学校の教育をよくしていくのかとか、あと予算編成の話とか多岐にわたって非常に細かい話をされて、新政権になってなかなかどういうふうに文部科学行政が行くのか見えない部分が私どもあった。それは学長としての個人的な部分はありますし、教育委員会としてもなかなか国が見えない部分があったと思うんですが、こういった方が副大臣をやっていただいて、ただ、お金が財務省との関係があるので、お金のほうもあると思うんですが、いろんなところの教員の定数も今回の予算では増加に転じたとかということで、頑張ってほしいなと思っているところでございます。

その中で特に初等、中等教育ですね。小学校、中学校の公教育のところはやっぱり一番大きく取り組んでいるところと言っていました。学力テストの件についてはお話がありまして、秋田県の状況と全国の比較ということで、かなり細かい説明をしていて、４つ理由を挙げて、勤めていた大学関係で教職もいろいろ持って、あとボランタリーでいろんな小学校のボランティアみたいなものの指導とかもやっているということで、ここら辺、実地で秋田県や福井県に行って調査もしたということなんですが、一番の理由は教員の質が高いと。皆様ご承知だと思うんですが、秋田県の教員試験の倍率は20倍ぐらいと。東京都は２倍ぐらいでしたっけ。やっぱり質が高い教員が集まっている。しかも、例えば福井県ですと、福井大学と県の教育委員会が連携して、さらにその教員養成について非常に心を砕いていると。

それから、量の問題ですね。一クラス当たりの児童数、生徒数が少ないと。ただ、この部分は東京や大阪などの大都市は別とすると、一般に地方都市は少ないので、必ずしもこれは秋田県とか福井県だけの問題ではないのかなとは思うんですが、ただ、やっぱり多いよりは少ないほうが効率はいいと思うので、中野区も少人数学級とか努力はしているとこ

ろなんです。あとは、北陸は３世代同居が多いので非常に生活のリズムができていると。夜寝る時間が早いと。朝もちゃんと起きると。私どもも今うちは小学校５年と１年生の子どもがいるんですが、なるべくやっぱり冬休みになっても９時には寝て、６時半に起こそうとしたんですが、だんだんやっぱり９時が９時半になって、その分６時半が７時になってとなって、きょうから新学期が始まったんですけれども、結構大変でした。

あとは、地域の協力がやっぱり得られやすいと。まだまだ地域社会の構造が残っているので、学校で例えば行事、学校公開とかやると、保護者じゃなくて住民の３分の１ぐらいが楽に集まると。そういった体制ができていると。ただ、それは単に体制ができているだけじゃなくて、行政としてそういうことをやっているということでございます。東京の中野と例えば北陸というのは、やっぱり社会の現実の状況も違いますし、年齢構成も違うので全く同じにはならないと思うんですが、そういったところも見ながら、中野は中野なりにやはりこういった学校教育の改善について取り組んでいく必要があるなと思ったところでございます。非常に勉強になりました。

私からは以上でございます。

大島委員長

では、山田委員、お願いいたします。

山田委員

私も昨年の話になりますけれども、12月20日は休日当番が当たりましたので、休日当番医を務めましたけれども、今、中野区は中野区医師会に委託する形で休日当番医というのは病院が２件、それから診療所が４件と計６件でやっているんですけれども、大体普通は月に休日当番にかかる区民の方たち、区民だけじゃないかもしれませんけれども、150から170ぐらいの件数なんですね、一月当たり。この10月からはやはりインフルエンザの影響かと思いますけれども、10月が大体550から560、11月が700、12月は1,000という形で、非常な勢いでふえているんですね。この20日も私のところの診療所でも60件を超えたと。診療所で新患、初めて来る方たちが50件を超えますと、受付をして診察を終えて処方を出して、かなり時間がかかるので、50件を超えますと、かなり厳しい状況になるんですけれども、12月30日に当たった小児科の診療所は110件という形で、８時から始めて終わったのは夜10時だったということで、こういった事態は何年かに１回ではないかなと思うんですけれども、やはり今区内の小児科の先生が少ない現況の中で、小児科という看板を掲げると、かなり混雑をしてしまう。12月30日は待ち時間が３時間余りだったということです

ので、大変な事態が起きているかなと思います。

そういった中で、やはり今後もどのように休日当番をやっていくかというのは、区民の方々の休日に対してのサービスということでは大変な事業でありますので、区と連携をしながらといいますけれども、こういった事態が今後は起きないように願うわけでございますが、その延長でございますけれども、インフルエンザの話で恐縮ですが、中野区医師会は今、中野区医師会を使って日曜日に集団における新型インフルエンザワクチン接種を行っておりまして、12月は大体１休日当たり500件程度をこなしまして、無事に終了いたしました。また１月も始めるわけでございますけれども、区民からの要望も強くありまして、学校教育担当も協力いただいて、12月25日付で区内の中学生につきましても、集団接種の希望があればコールセンターで予約してくださいということで拡大をいたしました。これは東京都のほうから接種優先者について中学生も拡大されることが１月には可能となりましたので、それを受けてのことであります。

ただ、今コールセンターの事情を聞いて見ますと、中学生はかなりかかっているようですね。半数ぐらいかかっているようでして、アクセスが多いのは中学３年生の受験を控えた方たちがぜひ打ちたいということで、少しコールセンターのほうに要請があるというふうに聞いておりますので、まだまだ受付はできますし、予約は多少余裕があるという状況でございます。１月も安全を旨に１月の来週からですね、17日、それから24日、31日と３日間でありますけれども、インフルエンザの集団接種を行うということでございます。

12月24日は、医師会では毎月第４の木曜日に子育てをしているお母さんたちにお集まりいただいての子育て応援団というのをやっているんですけれども、たまたま24日が第４の木曜日でしたので、クリスマスイブということもありまして、サンタクロースに私が扮しまして、絵本とぬいぐるみをプレゼントいたしまして、そのときは区内の助産師さんにお願いいたしまして、卒乳の話、断乳という場合もありますけれども、一般的には卒乳ですね。おっぱいをやめる時期はどんな時期がいいのかとか、そういったことについて助産師さんのお話を聞かせていただいて、あとは年末年始忙しいときにお節を利用した離乳食のレシピという形で、管理栄養士の方にお話をいただいて、その後はみんなでクリスマスの歌を聞きながらということで、クリスマス会をかねて行いました。毎月第４の木曜日ですけれども、最近はかなり定着してきまして、大体１回当たり40組から50組の親子といいますか、おみえになるので、ちょっと会場がだんだん狭くなりまして今後どうしようかなというふうに思っておりますけれども、そういった取り組みが日本医師会に認められまして、

２月に日本医師会のほうで母子保健研究会というのがあるんですけれども、全国に向けて医師会を代表して、私のほうから子育て応援の取り組みを発表する予定でございます。

年が明けまして４日は、中野区の賀詞交換会並びに教育委員会の仕事初めがありましたので、出席をいたしました。

私からは以上です。

大島委員長

では、教育長、お願いいたします。

田辺教育長

年末になりますけれども、12月26日の土曜日に江東区にありますピアラ江東大ホールというところで小学校の吹奏楽連盟主催のバンドフェアがありまして、武蔵台小学校が参加をいたしましたので、午後、武蔵台小学校の前後の学校しか聞けなかったんですけれども、参加して聞いてまいりました。ほかの学校に比べますというと、ちょっと手前びいきになってしまうんですけれども、やっぱり人数も多いですし、伝統もありますので、表現の方法ですとか楽隊の組み方なども堂々としていて、とても立派な演奏で、私初めてだったんですけれども、やっぱり伝統に支えられたこうした活動というのは大事だなというふうに思って聞いてまいりました。

１月４日は皆さんからご紹介があったように、仕事初め式と賀詞交換会がありました。区では、前は幹部職員全員を集めて区長から新年の冒頭のあいさつがあるというようなことをやっていたんですけれども、こういう時代になりまして、もうすぐに８時半から仕事をするというようなことになりまして、部長級以上の職員だけ集めて、簡単に区長から話を聞きました、賀詞交換会の前ですが。予算編成が年末年始にわたって予算編成作業をしているものですから、どうしても財政の話になってしまいまして、一昨年来からの不況に対応するであるとか、あと政権が変わりまして、今後の中野区ではなくて日本全体の構造がどうなっていくかということが先行き見えない中で、そう言いながらも生活に困窮される方に対してどうしていくのかとか、あるいは雇用を創出していくためには保育園の待機児対策をきちんとやっていくであるとか、中小企業に対してもきちんとした支援をしていくということで、どうしてもそういうところには手厚くやっていかなければいけないということで、そういう意味での話をして、きちんとした方向を見据えて、手厚くやるところは手厚くといったようなめり張りをきいた行政をしていかなければいけないというようなことでありますとか、それから、区役所や教員なんかもそうですけれども、若い職員が大

分入ってきていまして、人を育てるというか養成していくことの大事さというのを相互に確認させていただいて、新年を迎えたというようなことがありました。

それから、本日から冬休みがあけまして、ほとんどの学校では新学期ではないんですけれども、後期の最終段階を迎えています。ただ、一部の小学校では桃園小学校のように、インフルエンザの関係で２日ほど早く学校を開設したところもありますが、きょう教育委員会が始まる前に四中に行って、冬休みあけの集会というのがありましたので、ちょっとどんな様子かと思って行ってまいりました。子どもたち、とても落ちついていて、校長からあいさつがあったんですけれども、校長の話では年末年始でテレビや報道で、いろいろ各界で活動している方が今後の日本をどう考えるかというような話があって、国連で難民の救済に活動していた方ですとか、それから評論家の方のいろんなお話の紹介がありました。子どもたちはとっても落ちついて聞いていて感心したんですけれども、お話では、やっぱり外国で活動する日本の若者が少なくなっている。就業することも含めてですけれども、少なくなっているというようなことですとか、日本人が思いやりの心というのがなかなか持ちにくいというようなことをみんな心配しているんだよと。世界の中のこれからの自分ということをきちんと考えようねというようなことがあって、子どもたちはうなずいて聞いていまして、そういうこともこれから学校できちんと将来の職業選択という中も含めて教えていく必要があるなというのを感じたところです。

以上です。

大島委員長

では、ただいまの各委員からの報告につきまして質問、ご発言等ありますでしょうか。

どうぞ、山田委員。

山田委員

委員長と飛鳥馬委員のほうからのコミュニケーション能力の上高田の小学校のお話があったんですけれども、きのうの新聞でしたかね、私たちが今取り組んでいる小１ギャップの解消といいますか、低学年についてなるだけ少人数を十分に確保していこうという話をしているわけですけれども、新聞によりますと、いわゆる学校の空き教室を利用して保育園機能をつけるというのがきのうかなり新聞に大々的に出ていたと思うんですけれども、今確かに空き教室がある学校が多いということもありますし、あと、再編等で学校の跡地が残っているところもあるわけですけれども、今やはり近々の課題としては保育園の待機児童の解消という大きなこともあると思うんですけれども、その辺は私、余り今まで議論

していなかったと思うんですね。

一つには小さい子どもと一緒に接することで、自分のいわゆる自尊感情というものが芽生えて、それがコミュニケーション能力ということの活用だとか、広い意味ではそういったものに広がっていくんじゃないかなということで、ああいった新聞記事はかなり大きいインパクトがあるし、検討する価値はあるんじゃないかなと思うんですね。

実は兄弟も少なくなっている。核家族化が進んでいる中では、やっぱり異世代の交流といいますか、それが非常に大切なことじゃないかなと思って、先ほどから出ていますコミュニケーションとも関係するので、ぜひそういった視点も私たち、取り組んでいかなきゃいけないのかなと思うんですけれども、いかがでしょうか。

大島委員長

どうぞ、教育経営担当。

参事（教育経営担当）

空き教室のお話がありましたけれども、中野区の場合はキッズプラザ等の整備をしていますが、キッズプラザもそういう意味では放課後のいろんな児童生徒のための事業ということですので、全く関係ないわけではありませんけれども、なかなかそこに保育園という形になりますと、ちょっと今の状況ですと空き教室がなかなかないと。中学校は若干ありますが、できれば小学校とそういった保育園児の交流のほうがよりベターなのかなという感じがします。

今、本当に保育園の待機児対策というのは非常に喫緊の課題になっていまして、私どもも区の最重要課題というようなことで位置づけて、いろいろ施策を打っているところですので、教育委員会としてもできる部分については協力をしながらやっていきたいなというふうには思っております。

大島委員長

どうぞ、飛鳥馬委員。

飛鳥馬委員

いろんなやり方があるだろうと思うんですけれども、文京区には小学校の一角にちょっと広い学校ですので、デイケアの施設があるんですよ。お年寄りが通ってくる。小学校としょっちゅう連携しているというのがありますね。いろんなケースが考えられると思いますので、弾力的にそれは考えて、全部中野じゅうキッズプラザで同じじゃなくて、そういうところもあってもいいというぐらいに、弾力的にやっぱり考える必要があるかなという

のがあります。

それからもう一点は、学童保育を延長するというのを都教委が言っていましたね。また区も負担しなきゃいけなくなってくると思うんですけれども、今働いているお母さん方がもうちょっと遅くまで子どもを預けられるようにと言っていますが、学童とちょっと違うところがあるかもしれないけれども、でも、そういう延長保育との関係とかいろいろ出てくると思うんですけれども、ケース・バイ・ケースによると思うんですが、でも、困っている方がたくさんいらっしゃるので、何とかしてあげたいなというのは、それはやっぱりやらなきゃいけないことだと思いますね。

大島委員長

はい、どうぞ、山田委員。

山田委員

確かに今の飛鳥馬委員のお話で、保育園も今延長保育があるところが人気あるとかいろいろありますけれども、僕はやっぱり一つには子どもの視点をちょっと大切にしてもらいたいなと。もちろんお母さんたちの就労支援も大切なんですけれども、お子さんたちが長時間やはり親元を離れているということは、本来は余り好ましくないのかなと。泣く泣くのことではないかなと思うんですけれども、そういったことがやっぱり子どもたちにとってどうなのかなと。親と接する時間がなるだけ多いにこしたことはないんですけれども、だんだん減ってきているような気がしますね。

そういった中で、やはり我々医療界ではどうしても夜型の診療機能を持たなきゃいけなと。夜間の小児の救急などもそういったところにニーズがあることは事実なんですけれども、なかなかその辺は難しい問題かなというふうに感じております。

飛鳥馬委員

私も山田委員と同じことを考えているんです。親が困っているからといって、７時、８時まで預かって、ではだれが子育てするんだと一瞬思っている。それはあるんですが、とりあえず困っている方はいるので、要するに子育てをどういうふうに考えて、どうするかということにつながってくると思うんです。子どもは社会のものだから、社会で子育てをしなきゃいけないというそういう視点もありますし、でも、そうはいってもやっぱり親子だよねと、やっぱり愛情だよねとか、そういうこともありますので、非常に難しいことだと思うのですが。

というのは、きのうかおととといのテレビで子どものしつけについて、ちらっと短時間で

すけれども、やっていました。子どもが家で手伝いをしないから、手伝いをする子どもを育てたいというので、インターネットで募集したら、親子でもって東京の塾みたいなところに来るんですね。北海道から来たりするんですよ。きのう、おとといかな、テレビを見ていると。やっていることは何ていうことない。雑巾を絞るのはこうやるのよとか、はたきはこうかけるのよとか、そういうことをやっているんですよ。お皿はこう洗うとか、戸棚を片づけてきれいにするんだと。お母さんがインタビューで「やってくれるとありがたい」みたいな若いお母さんは言っているし、子どもは子どもで「お母さんからいきなり手伝えと言われるのは納得しないと嫌だから、よく言ってくれるとわかる」とか言っているんですよ。あれ、これはちょっと違うんじゃないかなと私は思うんですけれども、そういうのを広げて考えてみると、みんなそうなっちゃっているわけです。要するに遊びも何かＮＰＯか何かのおじさんが先頭になって集めて、ガキ大将みたいに子どもを遊ばせるのに大人がやっているでしょう。それから、スポーツ、運動能力がおくれているというと、今度は家庭教師が鉄棒を教えに来たりするわけでしょう、今。跳び箱とか縄跳びとか。だから、そういうことを考えると、本当に子育てというのはどうなのかなという気がするんですね。もっと広げていくと、やっぱり子どもの生きる力がそれで育つのかなと。大人がやっぱり面倒を見ているのは変わらないので、子どもが考えたり工夫したり応用したりする。それはさっき高木委員のお話にもありましたが、ペーパーだけでもって学力が育つわけじゃないのではないかという気もするんですよ。ちょっと、大げさですが。

それで、ちょっと誤解される可能性があるんですけれども、今財政難でお金が大変ですよね。お金があったほうがいいし、教育条件がすばらしいほうがいいわけですけれども、教育とか子育てというのは金だけかなと。金がなければできないかなということですよね。至れり尽くせりのところからは余りいい子どもが育たないような気もするんですね。だから、要するに教育の方法とか中身、今言われた子どものしつけみたいなのも非常に大事。今こそいわゆるチャンスだなというふうなことを思うんです。というのはちょっとこれもまた余分な話でちょっとごめんなさい。余り私たち教育委員会として、金がないからできないよ、できないよと。現場の先生方や校長先生方が言うことはいいのかどうかということです。萎縮しちゃう。金がなければできないと、そういう雰囲気が出なきゃいいかなということはあるんですね。だから、ないものはない、出ないものは出ないんですけれども、でも、先生頑張りましょうよとやっぱり励ます方法というかな、そういうのも問われているんだろうと思うんですよ。お金がないからできませんねじゃなくて、では何か別のこと

を考えましょうとか、こういうふうにやってみましょうとか、こういう事例がありますよとか、何かそういうことをやって、一緒にやっていくようなことをしないといけない。やっぱり何があろうと、子どもは育てなきゃいけない。教育はしなきゃいけないわけですから、だからそういう意味で、お金はあったほうがいいんですけれども、でもやっぱりないのが実際ですから、工夫しながらみんなで何とか知恵を出してやりましょうということが言いたかったんです。

大島委員長

私、飛鳥馬委員の意見に本当に賛成です。それで、ちょっと話を戻してしまいますが、山田委員が言われたことに関連して、延長保育とか、それから学童の延長とかそういうことに関して、親と接する時間がどんどん少なくなってどうなのかなという疑問を呈されたわけですけれども、そこで、その問題というのは非常に根本的な子どもはだれが育てるべきかと。社会が育てるべきかとか、親のかかわりが少なくていいのかという根本問題になるんですけれども、これを言うと私にも言いたいことが物すごくあって、とてもここでは言いきれないんですが。

それで、議論は別にしまして、ただ、ちょっと私はさきほどの意見はお父さんの視点がないなと思うんですね。親が見なきゃいけないというときの親というのはお母さんを想定しているように思えてならないんですね。遅くまで預けていいのかというときのその親が預けてというのは、お母さんが見なくていいのかというふうに言っているように聞こえて、お父さんは仕事で忙しいんだから別に家庭にいなくて当然ということはおかしいので、女は子育てすべきものなんだから、働くにしても子育ての邪魔にならない程度にしておきなさいというような言い方というのは、ある意味、女性の幸せとか女性の一人の人間としての生き方、アイデンティティの持ち方とか、そういうことにもかかわってくるので、やっぱりそれも大事にしなきゃいけないことだなと思うのと、それから、子どもは確かに親の愛情が必要だと思うんですけれども、愛情の表現の仕方は一義的ではなくて、いつも長時間一緒にいるから愛情が伝わるというものでもなくて、それはケース・バイ・ケースで、たとえ短い時間でも親の愛情を感じられるような接し方というのもあるんじゃないかと思って、その辺は多分、教育長は実感されているところじゃないかと思ったりするんですが。

私がちょっと知っているあるお母さんは、お父さんがたまたま余り働かない人だったものですから、仕方なくという面もあるんですけれども、昼も夜も働いていて、男の子と女の子がいるんですけれども、ほとんど接する時間がない。もう夕食もつくってあげられな

いというような状況だったんですけれども、でも、私はその子どもさんたちが成人になってからも会いましたけれども、すごくお母さんのことを尊敬しているんですね。ほとんど接してもらえなかったにもかかわらず、一生懸命働いて育ててくれたということで、とてもお母さんを守ろうとしているというようなことを見ると、時間ではないなということも感じていまして、そんなこともあるんです。

すみません、その問題は一方的に言うと、また他の委員もおっしゃりたいこともあると思うので、またちょっと別のところでということで。

田辺教育長

延長保育の問題はやっぱりきちんとどこかで議論したりすることも必要だと思うんですけれども、保育園とかあるいは幼稚園の機能の中に親を育てるというか、私も保育園の中で随分いろんなことを教えてもらいましたけれども、親を育てる機能というのは確実にもう割合として高くなっていて、それは父親を育てるという機能も当然あったりもして、それを受け取る側がどう受け取るかというのは問題なんでしょうけれども、そういうことも含めて、幼児教育というか保育行政の中での親を育てるということもこれから教育委員会の中でもちょっと議論をしていかなきゃいけないことかなという風には思います。

大島委員長

どうぞ、山田委員。

山田委員

委員長のお言葉は十分私も承知しているつもりであります。お父さんの視点がないというのではなくて、私のところでもお父様が検診に連れてこられたり、夜遅くにお父様が病気でお連れになる方もいらっしゃるので、別にそういったことではないと思うんですね。ただ、社会全体として子育てというものに対して、もう少しいろんな意味でサポートする機能をたくさんやっていかないと、本来であれば家庭の中で本当は３歳ぐらいまで育てられるような社会的な体系ができれば一番望ましいんじゃないかなと僕は思うんですけれども、なかなかそれが育休はとれるようになったけれども、なかなか男の人はとりにくかったり、女の人もお給料の保障がないとか、本当はもう少し社会が成熟して、子育てというものを社会的資源としてやるのであれば、その子育てしている方に対して、例えば税金の控除ですとか給料をしっかり払うようなシステムをするとか、そういったことができ上がれば一番いいんだろうと。そうしないとこの国はどんどん子どもが少なくなっていって、社会として成り立たない時代がおきてくる。そういったこともありまして、中野区医師会

で今やっている子育て応援団などもまさしく生後６カ月から１年、１歳ぐらいのお子さんを育てているお母さんたちがたくさん集まってきて、そのときにはかなりドクターもいるものですから、いろんなコミュニケーションがそこで出てくるとかということで、こういったことはお母さん、こういうことが起きたらお医者さんに見せてくださいよというお話をしながら、小児科の少ない資源を何とか活用しなきゃいけないということがあってやっていると。そういう事業も大切なので、それは社会的にやらなきゃいけないということでありますので、就労する方たちにどのように支援をするかというのは大きな問題ではないかなと思います。そういった中では、委員長を初め、教育長も女性ですので、女性の視点の意見というのは、非常に僕は大切なんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

大島委員長

ありがとうございました。

＜事務局報告事項＞

では、この問題はまたお話し合いすることもあるかもしれませんけれども、そんなところで、では事務局報告に移ります。

事務局報告はございますか。

参事（教育経営担当）

きょうはありません。

＜協議事項＞

大島委員長

それでは、協議事項に移ります。

協議事項の１番目、「平成22年度使用特別支援学級用教科用図書（一般図書）の採択の変更について」、協議を進めます。

では、説明をお願いします。

はい、どうぞ。

指導室長

それでは、平成22年度に使用いたします特別支援学級の教科用図書（一般図書）でございますけれども、変更をお願いすることがございますので、ご協議をお願いしたいと思います。

このことにつきましては、８月７日の教育委員会で採択をいただいたところですけれども、資料１にございます使用できなくなった図書、三省堂の「こどもきせつぎょうじ絵じ

てん」、それから学研マーケティングの「ＣＤつきえほん　えいごのうた」、この２冊が供給不能ということが判明をいたしました。「こどものきせつぎょうじ絵じてん」のほうは増補新装版が出るということで、この本がなくなるということ。それから、「ＣＤつきえほん　えいごのうた」については廃刊になるということで、この２冊につきましては供給ができないということでございます。

そこで改めてご採択をお願いするのは、次にございます三省堂の「こどもきせつのぎょうじ絵じてん」の増補新装版のほうが供給されますので、こちらを採択いただきたいということでございます。内容といたしましては、大きく変わってございませんが、増補というところでの里山の暮らしという章が入って、都会の行事だけではなくて、里山で行われている季節の行事についても入ったということでございます。

それから、学研マーケティングのこの「ＣＤつきえほん　えいごのうた」を採択したところでございますが、これにつきましては、この本がもうなくなりますので、改めまして採択はございませんで、ほかの中学校が使っております新学研の英語ずかん４巻「おもしろかいわ　ひとくち表現集」、これが採択をいただいておりますので、これを使うということで進めてまいりたいと思います。

以上でございます。

大島委員長

では、ただいまのご説明につきましての質問、ご発言ございますでしょうか。

ご説明にありましたように、適切な処置で特段問題はないかというふうには思われますが。

どうぞ、飛鳥馬委員。

飛鳥馬委員

英語のほうですが、今まで新英語ずかんというのがあるわけですね、採択して。このＣＤつきのほうがなくなってしまって、なくても新英語ずかんがあるからそれを使えるという話だと思うんですが、今までは２冊といいますか、両方を採択していたんでしょうか。そういうのが可能なんでしょうか。同じ英語でもですね。

大島委員長

はい、どうぞ。

指導室長

特別支援学級の教科用図書の一般図書でございますので、学校のほうから出てきている

ものでやりますので、例えば外国語であっても、この本とこの本とこの本というふうにできますので、１冊でなければいけないということはございません。その子に合ったものを使うということになります。

大島委員長

ほかにございますでしょうか。

どうぞ、山田委員。

山田委員

今度供給ができなくなったＣＤつきというのは、ほかの面でもＣＤがついている教科書というのは幾つかあるんでしょうか。

大島委員長

はい、どうぞ。

指導室長

ちょっと今、一覧はございませんけれども、特に外国語等につきましてはＣＤつきというのもございます。それ以外の副教材というか、学校で持っているものもございますので、あえてこれでなければいけないということではないということです。

大島委員長

ほかにございますでしょうか。

それでは、「平成22年度使用特別支援学級用教科用図書（一般図書）の採択の変更について」は、次回の定例会で改めて議決案件として審査をしたいと思います。事務局では、ただいまの協議内容を踏まえて準備を進めてください。

以上で、本日予定した議事は終了いたしました。

ここで、傍聴の皆さんに、今月の教育委員会の開会予定についてお知らせします。

来週１月15日と再来週１月22日は、いつもどおりこの場所で午前10時から教育委員会の会議を開会する予定です。

１月29日は、地域での教育委員会として会場を南中野地域センターに移して教育委員会を開会する予定です。開会時間はいつもどおり午前10時からです。

では、これをもちまして教育委員会第１回定例会を閉じます。

午前１０時４９分閉会